

<前回>オリエンテーション

前期：キリスト教と近代的知

後期：方法論的考察と聖書の社会論

オリエンテーション

I：象徴・言語・システム

1. 象徴・言語 1
2. 象徴・言語 2
3. 象徴・言語 3
4. システム・宗教

II：レトリック・メタファー

1. レトリック・メタファー
2. メタファー・モデル
3. イエスの譬え

III：コミュニケーション・解釈

1. 伝統と意味の地平
2. 多元性と対話
3. イデオロギーとユートピア

IV：宗教と文化——構造と動態

1/18

**I：象徴・言語・システム**

**1. 象徴・言語 1**

**2. 象徴・言語 2**

**3. 象徴・言語 3**

**4. システムと宗教**

**II：レトリック・メタファー**

**1. レトリック・メタファー**

**2. メタファー・モデル**

**3. イエスの譬え**

**III：コミュニケーション・解釈**

**1. 伝統と意味の地平**

**2. 多元性と対話**

(1) 言語世界とその外部をめぐって

1. 一切は言語的である。これはいかなる哲学的根拠を持つか。

これはいわば言語の事実性に依拠した立論。論理的には循環論。

2. 伝統における理解、理解における伝統の継続

理解の地平としての意味、地平融合としての理解

3. では、伝統批判は可能か（伝統の転換の可能性）

慣習的知恵に対する転換的知恵の根拠はどこに。

4. 人間存在の側の条件（アプリアリ？）として

構想力（個と共同体のそれぞれ、あるいは相互の連関）

カント→ハイデッガー

経験とデータの蓄積（「問い」の発生）

伝統外部への通路

5. 人間存在の側の条件（歴史的）として

伝統内部の多元性と諸伝統の多元性

## （2）意味の地平と多元性

6. 意味の地平の非完結性と多元性（意味の断片）

諸伝統の相互関係・対話の成立の場

意味論と終末論（終末と先取り）

7. 形式性における普遍的な前提としての言語、言語・意味は、存在論的概念である。

討論・対話の形式的条件としての語用論

ハーバーマスの普遍的語用論（Universalpragmatik）

8. 理想的発話状況（die ideale Sprechsituation、歪み無きコミュニケーション状況）の先

取り＝終末論

コミュニケーション的言語使用の四つの妥当性要求＝言語論

相互の理解、認識の共有、相互の信頼、相互の調和という相互主観的關係

理解可能性(Verständlichkeit)

真理性(Wahrheit)

正当性(Richtigkeit)

誠実性(Wahrhaftigkeit)

↓

現実のコミュニケーションの成立の場：

「相互に妥当請求を承認していることを相互に理解していること……」

つまり、無限遡及のパラドクスを内包した言語論的構造。

cf. オートポイエーシス（自己組織化）のパラドクス（10/26の講義）

↓

真理とは何か：真理の合意説

10. 多元的状況下での課題としての対話（理解の一形式）

宗教間対話：理論的解明（哲学的・神学的）と実践的手続き

テイリッヒ（芦名定道『テイリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994年。）

1) 宗教現象学・宗教史学→類型論、動的類型論

比較という作業：三位一体論の位置（多神教、一神教、三一神教的一神教）

*Systematic Theology. vol.1, 218-230.*

↓

比較を通じた理解の深化

キリスト教と仏教との比較・対話

1) 相違：神の国と涅槃、政治的共同体の象徴と個人的存在論的象徴

倫理と神秘主義

S. Ashina

cf. ヒック：人格／非人格

2) キリスト教における存在論的神秘主義的要素の発見

3) 宗教経験の類型論から要素論へ、そして構造論へ。

## 2) 対話をめぐる諸問題

- ・ 対話の条件：*Christianity and the Encounter of the World Religions*, 1963.

(Paul Tillich. *Main Works*, 5), p.313

対話の名に値する対話であるために

(a) 相互に相手の宗教の価値を承認し合うこと。固有の真理性をもつ相手。

(b) 対話の当事者がそれぞれの宗教を代表していること。自らの宗教に対する確信と説明能力。

(c) 共通基盤 (common ground) の存在。 cf. common basis：統合の基盤

(d) 相手の批判に開かれていること。

- ・ 対話の意義（何のための対話か？）あるいは動態

対話を媒介とした自己理解の深化

cf. 内省による自己理解＝現象学と外部を媒介した自己理解＝解釈学

↓

自己と他者の動的連関

理解と批判の媒介

他者と批判を経由する自己理解

→ 自己のユニークさは実体論的な出発点ではなく、対話の過程で発見され、構成されるもの（＝課題としての自己、自己に「なる」）。

- ・ 対話の主体

個人／共同体／思想 → 科学と宗教の対話の場合

公式の教会組織との関わりを持ちつつ、その周辺で

解放の神学、あるいはキリシタンの場合

基礎的共同体 (Pieris, the basic communities)

組・講（狭間芳樹「近世における民衆と宗教——キリシタンと一向宗」、

芦名定道編『比較宗教学への招待』晃洋書房）

現代日本、現代の東アジアでは？

スピリチュアリティ・個人主義以降の共同性

↓

個人と共同体との関係性についての理論構築が必要。

人格と共同性（再び、ティリッヒでは、個別性と参与の両極性）

↓

## (3) 展望——自己と他者、あるいは我と我々

11. 伝統・意味の地平の多元性（多）が捉えられる場はどこにあるか。

終末論的地平としての形式的意味性とそれを信念として共有すること。

12. 自己と他者の弁証法

自己の内なる他者と自己の内的な多元性

リクールとその後の自己論

↓

芦名定道『『アジアのキリスト教』研究に向けて——序論的考察』

『アジア・キリスト教・多元性』（現代キリスト教思想研究会）第8号、2010年、  
pp.79-104、特に注(28)を参照。

Léon Turner, *Theology, Psychology and the Plural Self*, Ashgate, 2008.

1 The Crisis of Identity: Diagnosing and Healing the Frangmented Self

2 The Destabilisation of Identity in Contemporary Social Thought

3 The Problem of the Self and its Reprasetation

4 Experiential Multiplicity, Narrative Identity and Pathologies of Self

5 The Unity of the Person and the Doctrine of Imago Dei

6 Pannenberg and McFadyen in Dialogue with Psychology

Conclusion: Reconfiguring Theology's Dialogue with Psychology

13. 「我々」とは誰か？ 我々はどこに成立するのか？

現代神学の弱点 (cf. 森田雄三郎)

辻村公一

「私のテーマは、ヘーゲル的な「吾々にとって」(Das Hegelische "für uns")である」、  
「その問は、ヘーゲル的な表現である「吾々にとって」といはれる場合の「吾々」  
とは何者であるか、といふことである。」

「IV ヘーゲル・「吾々にとって」」、辻村公一『ドイツ観念論断想 I』創文  
社、1993年、149-171頁。

↓

構想力の社会的次元あるいは社会的構想力へ

イデオロギーとユートピア

### Ⅲ：コミュニケーション・解釈

#### 3. イデオロギーとユートピア

##### (1) 意味世界の転換とユートピア

・意味世界（システム）AとB、意味根拠 a と b、

転換：A→Bに際して、意味根拠は競合する諸意味世界に対して、正当化と転換（批判）  
という二重の機能を果たす。

意味根拠の正当化機能＝イデオロギー、転換（批判）機能＝ユートピア

宗教は、本来イデオロギーとユートピアの二重性において機能しているのである。

・「宗教は、現状の秩序を維持することに限らず、革新的な制度の導入をも正当化するため  
に用いられる。『ローマ史論』は、その豊富な実例をあげている。こうしてマキャベリは、  
宗教の社会的機能と基本的重要性とを認識したのみでなく、それを一般的に理論化するこ  
とも試みている。」（宮田光雄『国家と宗教——ローマ書十三章解釈史＝影響史の研究』岩  
波書店、2010年、123頁）

## （2）ピューリタニズムと民主主義

1. 一七世紀のイギリスにおけるピューリタニズムと近代民主主義との関係。
2. パトニー討論とその意義

- ・「パトニー討論」（1664 年 10 月 28 日から 30 日）と法哲学者リンゼイの解釈

革命の中、軍隊の急進派から出された「人民協約」（An Agreement of the People for a firme and present Peace, upon grounds of common right and freedome）の審議のため、ロンドン郊外のパトニーの教会堂で開かれた軍幹部会議が開かれた。

- ・ピューリタン革命：絶対王政と共和制という政治システムをめぐる戦争であると共に、イギリス国教会制度とピューリタニズム（これには、多様な宗教的主張が含まれるが、国教会制度を越えて宗教改革をさらに推進するという点では一致していた）という、宗教的な意味根拠をめぐる闘争でもあった。

3. クロムウェルの「ニュー・モデル軍におけるこうした宗教的理念の果たした役割の大きさ」

クロムウェル部隊の強さの秘密がその徴兵方法にあったことは、これまでも多くの論者の指摘するところであった。…………「敬虔で正直な者」と「自分が何のために戦うかを知っている者」とを積極的に採用した。彼らは『携帯聖書』を携えて戦闘に望み、また、『兵士のための問答』という冊子は自分たちの戦いの目的がプロテスタント宗教を教皇の手から守り、インドランドの法と自由とを専制政治から救い出すことにあることを教えた。（大澤、1999、21）

4. 宗教的な根本理念（意味根拠）のレベルにおける選択：絶対王政と国教会制度を支える階層的秩序か、宗教改革の万人祭司（神の前の平等主義）か、というだったのである。軍幹部（クロムウェル、アイアトン）とレヴェラーズ（レインバラ）との間の成人男子普通選挙権などをめぐる討論。

リンゼイ：パトニー討論に表れた民主主義の三つの基本原理を概観することによって、ピューリタンの宗教的精神性（意味根拠）と民主主義（意味世界）との相互関係。

5. 同意の原理：レインバラ大佐（レヴェラーズの代表）

イングランドで最も貧しい人といえども、最も大いなる人と同様に、生きるべき生命を持っていると本当に思うからである。それゆえ、実際のところ、よろしいか、ある政体の下で生きねばならぬ人は誰であれ、まず自分自身の同意によって我が身をその政体の下に置くべきだということは明確だと思われる。それに、イングランドの最も貧しい人でも、厳密な意味では、我が身をその下に置くための投票権を持たされていない政体になど、少しも縛られはしないのではなかろうか。

（パトニー討論、1999、176）

6. 民主主義：主権者としての国民の同意が必要。国民の普通選挙権の要求。

しかし、私はその選挙権という所有権が、イングランド王国においては、他の何者にも勝れて貴族や郷紳や特定の人たちに属する所有権であることを否定する。

（パトニー討論、1999、190）

↓

政府や権威者が国民に対する約束（契約）を破った場合には、国民の側に抵抗する権利を認める。「人民協約」（レヴェラーズ）は、「自然法に基づく自己保存と抵抗権」を主張す

るものであり、レヴェラーズはこうした理念に基づく政治システムの樹立を目指した(大澤、1999、29、44)。

リンゼイ：同意の原理や抵抗権の基礎にあるのは、人間に生得的な人権という観念。宗教改革的な神の前に立つ人格的な一存在者(信仰者)という点で、聖職者も平信徒も平等である、という万人祭司の精神。

7. 討論の原理：同意は討論の結果到達されるものであって、決して討論の前提ではない(クロムウェル)。

クロムウェルにとっては、民主主義機構の目的は、各人の抑え難い良心が語る事柄に耳を傾けることによって、また神の意志を学ぼうと望んでいるひとびとの、率直で忌憚のない討論にもとづいて、見出されねばならないなにものかを看破し、発見することにあります。(リンゼイ、1964、32)

関係者全員の同意から出発することではなく、むしろ、意見の「不一致と批判を容認し、かつ要求」すること、「各人の相違を認めた上での平等」(リンゼイ、1964、61、63)

反対政党の存在を許さない政治は、もはや民主主義とは言えない。

8. 討論の原理は、「キリスト教の集会の経験」(リンゼイ、1964、32)に基づいている。

キリスト教の集会：「神の意志」を発見すること。それは、異なる意見を持った者たちの討論による。各自が所有する神の意志についての異なる諸部分の知識を討論の中で語り合い、共有し合うときにはじめて、神の意志は十分な仕方で、発見される。

クロムウェルにとっては、同意は結果であっても条件ではなかったのであります。かれは、民主主義の条件とは、それに関係するすべてのひとびとが、かれら自身の意志を表明しようと努めることではなく、神の意志を表明しようと努力することであると考えていました。このことは、ひとびとが、すすんで、他人と自由に、しかも隔意なく議論を進め、そして、その時の事態についてかれらのもつ知識と経験のすべてを用立たせようとする限り、たとえ誰であっても、その〔神の意志〕発見にあずかり得るのだということ、なにほどこか意味していたのであります。

(リンゼイ、1964、35)

9. 集いの意識

・民主主義の弱点(?)：集団の規模が大きくなり、討論が代表者の手に委ねざるを得なくなるとき(=代議制)、主権者である国民と代表である政治家との間に存在する隔たりから、様々な弊害が生じることになる。

そこに欠けているのは、「集いの意識とでも呼ばるべき不思議な雰囲気」(リンゼイ、1964、38)。代表者である政治家が、国民の代表としての責任を自覚しつつ、議会という討論の場に集うとき、討論は民主主義の名にふさわしいものとなる。

しかし、実際、私が言及したいのは、次のことにほかならない。すなわち、私が主の御前において心から確信しているごとく、我々を一つに統合することに、〔そして、〕神が遂行を望んでいると我々に開示されていることに資すること、がそれである。そして、そういう心でここに会してはおらず、自分はそういうことに味方するものではないと敢えて口にする者、私はそういう者をペテン師なのではないかと思う。

(パトニー討論、1999、86)

10. 集いの意識は、ピューリタンの集会という「宗教的民主主義の基盤」の中で体験され

S. Ashina

ていたものであった。

このことは科学的な理論でもなければ、常識からくる教えでもありません。じつに、宗教的かつ道徳的な原理なのであります。これは、すべての信仰者は精神的〔靈的〕には祭司であるということを、神学的でない言葉にいい換えたにすぎません。

（リンゼイ、1964、19）

11. 人権の平等性という理念：中世の封建制や近代の絶対王政の下にあっては、未だ存在しないユートピアに属する理念だった。

不平等と不自由という現実において提示された自由と平等のユートピア的理念

宗教的精神性に基づくイマジネーションの産物であったとしても、決して無意味な幻想などでなかったことは、その後の歴史の示すとおり。

↓

終末思想：日常的で常識的な現実感覚を越えたユートピア的理念を、生き生きとしたイメージによって開示する場として機能してきた。

↓

社会的構想力

### （3）イデオロギーとユートピア

前近代から近代へのシステム転換に関して、キリスト教が積極的に関与できたのは、キリスト教が自らの内にイデオロギーとユートピアとを動的かつ有機的に統合し得ていたからである。そこにおいては、一方で、既存の意味世界の諸領域との動的連関が確保されており（状況適合性→しばしばイデオロギーへ偏る）、他方で意味根拠への志向性が確かな仕方で保持されていた（自己同一性→しばしばユートピアへ偏る）。それは、一七世紀という時代状況においては、自律的理性の圏域である意味世界とその宗教的意味根拠の次元とが、まだ分離せずに、キリスト教的宗教において統合されていたということに他ならない。

#### <補足>

- ・人間の住む意味世界の無根拠さについては、二〇世紀の多くの哲学者が指摘するところであるが、たとえば、ハイデッガーは、「世界の指示性と非指示性の二重性」という観点からこの問題を展開している。つまり、世界は、内世界的に手許に有るものの意味連関の分析から出発するとき、指示性という構造を頭わにするが、不安において開示される世界の相は非指示性として特徴づけられる〔辻村、一九七一、七七一―八〇頁〕。世界は、このような二重性によって理解されるのである。これは、「『彼のために』（umwillen seiner）といふ規定性が『彼自身の無』すなわち『死』といはば背中合わせになつてゐることに基づいてゐる」〔辻村、一九七一、八八頁〕のである。
- ・「意味の地平」と「地平の彼方」との関係については、本文でも引用した次の文献を参照いただきたい。〔上田、一九九七、九頁〕。
- ・この宗教の概念規定をめぐる諸問題——イメージ化を通したパラドックスの解消としての宗教、広義と狭義という宗教概念の二重性などを含めて——については、次の文献を参照いただきたい。

芦名定道（一九九三）『宗教学のエッセンス』北樹出版。

芦名定道（一九九四）『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版。

- ・たとえば、討論の中心をしめるアイアトンとレインバラとの、選挙権についての見解の相違は次のようにまとめられる。

アイアトン：選挙権は財産に基礎をおくべきであって、それは国の存亡に恒久的な利害関係をもつ人間に限定されべきである。

レインバラ：もっとも貧しい人でさえ、生きるべき生命をもっており、他の人から思いのままに取り扱われたり、規制されたり、また利用されてはならない。したがって、選挙権は人間の自然権・生得権である。

もちろん、大澤が指摘するように、両者の相違は、状況認識と戦略的意図によって規定されていたことも忘れてはならない。「アイアトンとレヴェラーズとの見解が真っ向から対立するというのは、……。つまり、クロムウェルやアイアトンの『古来の憲法（国制）』への傾倒は、彼ら固有の政治哲学に由来するというより、たぶん彼らの状況認識から来る戦略的な意図が働いていたと見るべきである。レヴェラーズはロンドン民衆に支持基盤を見出していた」（大澤、1999、34）。

#### <参考文献>

1. 芦名定道・小原克博『キリスト教と現代世界——終末思想の歴史的展開』世界思想社、2001年12月、14-38頁、に対応。
2. 大澤麦（1999）「<訳者解説>ピューリタン革命における「パトニー討論」——その背景と政治思想的意義」大澤麦・澁谷浩訳『デモクラシーにおける討論の誕生—ピューリタン革命におけるパトニー討論—』聖学院大学出版会。
3. リンゼイ（1964）永岡薫訳『民主主義の本質—イギリス・デモクラシーとピューリタニズム—』未来社。
4. 芦名定道「ティリッヒのユートピア論」、『ティリッヒ研究』（現代キリスト教研究会）、第3号、2001年、73-82頁。